

ヘイトスピーチ解消法の意義と展開 —差別の煽動を根絶させるために—

講演要旨

有田芳生 先生

(参議院議員・ジャーナリスト)

2016年10月2日

日本社会の閉塞感

私は21年前にオウム真理教が起こした「地下鉄サリン事件」を契機に、カルト犯罪や霊感商法と戦うジャーナリストとして活動してきました。しかし、どうしても偏った仕事の依頼しか来ないので、もっと起承転結のあるノンフィクションを書きたいと思い、歌手である都はるみさんを題材とした『歌屋都はるみ』（文藝春秋）を書きました。都はるみさんは1976年の「日本レコード大賞」を受賞するのですが、その時に「都はるみのお父さんは韓国人だ」、「レコード大賞は日本人がとるべきだ」と嫌がらせ、差別を受けたことがあるとテレビで語っているのを見て、どのような人生を送って来たのだろうと思ったのがきっかけです。

私の高校、大学の同級生の中には、在日韓国・朝鮮人や被差別部落の方々もいました。音楽業界のみならず、そういった日本社会の差別の不合理やひどさの一端を肉声として聞いたことや、感覚として思っていたことが、今の私の仕事

に繋がっているのだと思います。

「ヘイトスピーチ解消法」というのは、日本で初めてできた反差別理念法です。もつといえ、在日韓国・朝鮮人の方々のための法律なのです。差別の現場で戦う人たちが、それを支える全国の様々な人たちの力でこの法律を成立させたのだと考えています。

今日の講演の準備として、権赫泰さんという韓国の研究者の『平和なき「平和主義」 戦後日本の思想と運動』（法政大学出版局）という本を読みました。表紙には戦車が街の道路を進んでいる写真が使われています。最初は韓国の軍事政権下の写真かなと思ったのですが、これは1953年1月に日本で撮影された写真なのです。警察予備隊が保安隊となり、自衛隊となっていく時代に、戦車が堂々と路上を通る、そんな時代があったのです。これが日本の戦後の出発点なのです。

権赫泰さんが韓国から日本に留学に來たのが1985年です。最初の日本の印象について、「とても平和な国だと思った」というよう

なことを書いておられます。そのまま紹介すると、「1985年に反共軍事独裁末期の「暗い」韓国を離れて日本に辿り着いたが、その時に経験した日本社会は今とは大分違っていた」。今というのは安倍政権の下です。「多少は衰退の兆しはあったが、それでも当時は、依然として「平和」と民主主義という価値が空気のように人々の日常を包み込んでいた。「平和」という言葉も溢れかえっていた」。

日本社会でも「平和ぼけ」という言葉が使われるようになっていた時代ですけれども、1985年の日本は、まだ平和とか民主主義というのが思っていた時代でした。

私も出版社を辞めてフリーとして原稿を書きはじめた頃で、個人の人生としては暗い時代を生きていたのですけれども、しかし日本社会はバブルに向かって進んで行く華やかな時代でした。イデオログーや学問の世界でいえば、平和や民主主義というものがまだ溢れ返っていた時代でした。私自身の感覚で言うと1985年より、1960年代や1970年代の方